

認知主義の陥穽*

——会話分析と言説分析——

田 中 耕 一**

すでにわれわれは、社会的構築主義、とりわけ社会問題の構築主義について、その論理構造を検討して、表象主義（認知主義）のもたらす問題点を指摘しておいた（田中 2003）。その骨子は、およそつぎのようなものであった。（社会問題の社会的構築主義は、何ものかを何ものか（「社会問題」）として「語る」という営み（「クレーム申し立て」）、すなわち観察や記述が、その何ものかを事実（「社会問題」）として「構築する」のだと主張している。しかしながら、一般的に言えば、ある行為を（事前であれ事後であれ、あるいは明示的であれ暗黙にであれ）認知・表象したり観察・記述したりすることは、けっしてその行為を構成（構築）する不可欠の契機ではない。むしろそれは、観察・記述される行為＝実践とは別の新たな行為＝実践であると考えなければならない。この点を見誤り、表象主義（認知主義）にとらわれることによって、かれらの議論は、解決不可能な再帰性の罠につかまってしまうことになる。

本稿では、社会的構築主義に関係が深い言説分析¹⁾ (Discourse Analysis) をとりあげ、会話分析 (Conversation Analysis) と言説分析の主張を比較検討することによって、あらためて認知主義の陥穽について考えてみることにしたい。

1. レリバンスの原理²⁾

——シェグロフの問題提起——

まずはじめに、1997年から1999年にかけて、会

話分析と批判的言説分析の名のもとに、エマニュエル・A・シェグロフと、マーガレット・ウェザレルそして後にマイケル・ビリクとの間で交わされた論争 (Schegloff 1997, 1998, 1999a, 1999b; Wetherell 1998; Billig 1999a, 1999b) に注目してみたい。というのも、そこから会話分析と言説分析の間を隔てている最も重要な論点、析出できるからだ。

この論争のきっかけとなった論文 (Schegloff 1997) で、シェグロフが主張しているのは、およそ以下の三点であるといつてよい³⁾。

まず第一に、会話、あるいはそれが相互行為であるという意味で「相互行為内トーク (talk-in-interaction)」は、その当事者たちにとって、固有の意味をもっており、いかえればそれは、それ自身の構成的意味、それ自身の見地、それ自身のリアリティを備えた「独自の権利をもつ探求の対象」 (Schegloff 1997: 171) であるということ。しかもその固有の意味は、基本的に、会話あるいは相互行為内トークの各段階で「示されて (display)」いるはずだということ。というのも、もしそうでなければ、そもそも当事者たちが、相互に理解しあうとか、あるいは相互に理解しあっているということを理解しあうことはできなくなってしまうだろうから。したがって会話あるいは相互行為内トークの社会学的分析は、それらに内在的・内生的な観点によって、基礎づけられるものであるということになる。

第二に、このような分析目標を追求することに

*キーワード：認知主義 会話分析 言説分析 制度的相互行為

**関西学院大学社会学部教授

1) ここでとりあげる諸研究の場合、訳語としては「談話分析」の方がしっくりするような気もするが、それらが少なくとも表面上は、ミシェル・フーコーとの関係をうたっていることもあり、「言説分析」で統一する。

2) レリバンスについては、Schutz (1971=1996) や Sperber and Wilson (1986=1993) の議論が参考になる。いずれにしても、そこで問題になっているのは、文脈の選択性という問題である。

3) ほぼ同様の論点は、Schegloff (1987=1998, 1991, 1992) でも、すでに展開されている。

よって、どのような文脈（あるいは文脈の諸側面）が、分析のために考慮に入れられるべきなのかということについての制約が課されるということ。いいかえれば、会話あるいは相互行為内トークを内在的・内生的に分析するためには、当事者たちにとってレリバントであることが、当該の場面で示されているような文脈（あるいは文脈の諸側面）のみが、考慮に入れられなければならないのであって、分析者が、そのようなレリバンスを無視して、自らにとってレリバントな文脈を勝手に付与して解釈してはならないということである。分析者が志向する文脈ではなく、当事者たちが志向する文脈が、考慮に入れられなければならない。「事態が、まず第一に、参与者たちにとってどのようであるか」（Schegloff 1997: 178）が優先されなければならない。

したがって第三に、このような分析上の制約は、それによって学術的あるいは理論的な帝国主義、つまり知識人の関心や先入観を、その対象に対して、無理やり押し付けることを防止するための有益な制約にほかならないということである。

もう少し詳しくみていこう。シェグロフによれば、われわれが何らかの Kategorie を使って、ある人に言及する場合、その Kategorie を使うことは、その人が「実際にそうである」ということだけによって、根拠づけることはできない。たとえば、だれかが事実として「女性である」からといって、それだけで、その人を「女性」として言及することを正当化することはできない。というのも、その人は、ある人種、ある階級・階層、ある学歴、ある年齢など、同時にさまざまな Kategorie で名指すことのできる人であるはずだから⁴⁾。

ここで、Kategorie ということばを、文脈ということばにおきかえてみることは、容易である。すなわち、会話や相互行為内トークを取り巻いているさまざまな文脈は、それが真実であるというそれだけの理由によって、その使用を、つまりその文脈によって当の会話や相互行為内トークを理解することを、正当化し、根拠づけることはできない。たとえば、たしかにある相互行為が「病

院」という場で行われたとしても、同時にそれは、ある「国」のある「町」という場で、あるいは「屋外で」ではなく「屋内で」行われたのであるし、もしかしたら「廊下で」ではなく「部屋で」行われたのかもしれない。しかもその当事者たちが、たしかに「医師と患者」であったとしても、かれらは同時に、さまざまな別の Kategorie によっても特徴づけ可能な人々であることは、すでに明らかであろう。

もちろん、だからといって、ある人をどのような Kategorie によって特徴づけてもよいのだとか、どのような文脈によって会話あるいは相互行為内トークを解釈してもよいのだ、ということにはならない。では、Kategorie や文脈のどのような使用が正当であると考えたらよいのか、その基準とは何なのか、ということが問題になってくる。どのような根拠にもとづいて、ある Kategorie や文脈の使用が、したがってある仕方の記述が、他のそれに比べて、優先されるべきだといえるのか。

シェグロフは、この問題に対して、二つの立場を対比している。第一の立場は、かれが「実証主義的」と呼んでいるもので、分析者の立場あるいは科学的説明の見地から、ある記述の仕方が、たとえば統計的に有意な仕方で、何らかの成果や知見をもたらすかどうか、しかもそれが理論的に解釈可能であるかどうか、というような基準を設定するものである。つまり、ある Kategorie 化が、分析者の側からみて、どれだけ役に立つかという観点から考えようとするものである。

第二の立場は、会話あるいは相互行為内トークは、当事者たちの志向している Kategorie や文脈によって、そのようなものとして構成されているのであるから、特権化されているのは、この当事者たちが志向している Kategorie や文脈であり、それを理解し、記述しようとする分析者にとっても、同じものが特権化されているのだというものである。いいかえれば、分析に際して、どのような文脈や Kategorie が選択されるべきかを決定する基準は、当事者たちの志向であり、かれらにとってのレリバンスなのだということになる。

4) サックスは、このように、母集団のあらゆる任意のメンバーを Kategorie 化することのできる Kategorie 化装置の特性を「Pn 適合的」と呼んだ（Sacks 1972: 33=1989: 98）。

いうまでもなくシェグロフは、第二の立場をとる。もし、第一の立場をとるなら、研究者・分析者によって、あるいはその関心や先入観によって、現実を勝手に解釈することになってしまうからだ。

シェグロフは、ジェンダーの問題を例にとって、会話における割り込みとオーバーラップの問題を、直接にジェンダーによる地位と権力の非対称性のあらわれとして解釈しようとするやり方⁵⁾を批判し、いっけん割り込みにみえる発話が、会話の内在的な組織にしたがって、十分に説明できることを示している (Schegloff 1997: 175-178)。かれは、会話そのものを、直接的に外部的な要因と結び付けるような分析は、参加者たち自身の明白に示された関心、参加者たちが互いに関係している仕方、参加者たちが志向していることを示しているレリバンスに対して、いかなる余地も与えていないと主張している。言説は、あまりにしばしば、参加者たちがつくる文脈ではなく、分析者が固執する文脈に屈従させられている。

「形式」分析⁶⁾と批判的言説分析の双方を豊かにすることのできる分析の一つの方向は、つぎのような行動の形式がどのようなものであるかを解明することであろう。つまり、それによって人々が、ジェンダー、階級、そしてエスニシティを「行い」、そしてそれによってかれらが、相互行為の文脈としてのそのような特性への志向を示し、喚起していることが明らかになりうるような、そのような行動の形式を解明することであろう。(Schegloff 1997: 182)

2. 言説分析の立場から

(1) ウェザレルの反論

社会的構築主義の立場にたつ「言説心理学 (Discursive Psychology)」⁷⁾の流れに近いマーガレット・ウェザレル (Wetherell 1998) は、社会心理学に関係するかぎり、言説分析として総称されるもののなかには、エスノメソドロジー・会話分析の伝統と連携しようとするスタイルと、いわゆるポスト構造主義をスローガンとするスタイルがあるとしたうえで、自らは、より総合的なアプローチを目指すとしている。その意味で、ウェザレルの議論は、両面的であり、悪くいえば折衷的であるといわざるをえない。彼女が、両者のスタイルを比較検討する際に、基準としているのは、「なぜここでこの発言が行われたのか」という問いである。ウェザレルによれば、会話分析の方法、とりわけ会話の内在的意味に分析を限定するやり方では、この問いに十分に答えることができない。

そもそも言説分析という場合の「言説」⁸⁾には、たんにそれが相互行為に限定されないとか、口頭でなされる発言に限定されないというばかりでなく、そもそもそれ自身が一つの対象というよりも、むしろさまざまな対象を取り巻き、それを構成している、広い意味での知識 (記号、表象、イメージなど) の社会的な配置の全体を指す場合があり、したがって単純に、会話や相互行為内トークと比較することには無理がある。というのも、その場合には、会話に内在するものと外在するもの、つまり会話の内と外というような意味での、言説の内と外の区別それ自身が、必ずしも意味をもたないからである⁹⁾。

かといってウェザレル自身は、このような「より包括的な言説の概念」によってたつスタイルに、完全にコミットしているわけではない。それでもしかし、シェグロフの主張——批判的言説分析が、分析者独自の準拠枠を、すでに解釈され、自生的に構築された世界に対して押し付けている

5) 周知のように、この種の古典的研究は、Zimmerman and West (1975) である。

6) シェグロフは、「発言の意義は、それが発話される仕方にある」(ガーフィンケル) という意味で、自らの分析を「形式」分析と呼んでいる (Schegloff 1997: 179)。

7) 言説心理学については Edwards and Potter (2001, 1992) や Harré and Gillett (1994) を参照。

8) 言説の定義については Parker (1992: 3-22)、あるいはもちろん Foucault (1972: 49=1981: 77) も参照。簡潔な説明としては、Burr (1995: 48-51=1997: 74-79) が便利である。

9) ウェザレルは、このような立場にたてば、社会空間の全体が言説空間となり、言説とそうでないもの、トークと世界を区別することは意味がなくなると述べている (Wetherell 1998: 393)。

とか、トークのなかでは、参与者たちが、場面と文脈をかれらがどのように理解しているかを、相互に示しあっているという観察から出発すべきであり、決定的に重要なのは、参与者たちにとって、何がレリバントであるかということであって、分析は、相互行為の内的な意味と一貫しなければならないという主張——は、たんに分析の可能性をあまりに狭く制限しすぎているというばかりでなく、理論的にも十分な根拠をもつものではない、と反論している。

というのもウェザレルによれば、シェグロフは、分析者が自らのカテゴリーを当事者たちの言説に輸入すべきではないといいつつ、「条件的レリバンス」とか「説明可能性」などといった専門的概念を使って、トークのパターンを同定しようとしているからである。つまり会話分析もまた、当事者たちにとって外的なカテゴリーや概念を、分析のために導入しているのではないか、というわけである。それなのに、なぜ批判的言説分析だけが、分析者の関心や先入観を輸入していると非難され、会話分析はそれから自由であると断言することができるのだろうか。

ウェザレルによれば、当事者たちの志向やレリバンスを定義しているのは、最終的には、会話分析を行う分析者なのであって、その意味でわれわれは、理論家のカテゴリーと関心の押し付けから逃れることはできない。つまり純粋に会話の内部、参与者たちの志向とレリバンスに分析を限定することなど、論理的にできない相談だということである。だとすれば、最終的には、分析者自身をも含む、より包括的な言説の概念に頼らざるをえないはずである。

シェグロフのアプローチが求めているものにしたがうなら、分析者は、会話的活動を通して走り、それをたて糸とよこ糸として、より大きな布へと結びあわせている論談的な糸(argumentative threads)への関心を失うことになってしまう。それとは対照的に、系譜

学的分析が示唆しているのは、われわれが論談的な織物の一部を分析する場合には、その織物を貫いている、より広い理解可能性の形式にも注目しなければならないということなのである。(Wetherell 1998: 403)

分析が、必然的に、参与者たちにとってレリバントなもの、参与者たちの志向に限定できない以上、それを構成している「そこにはないもの(沈黙と欠落)」にも目を向けなければならない、というのである。したがってウェザレルの結論は、以下のようなものである¹⁰⁾。

「なぜこの発言がここにあるのか」という問題に対する、より適切な分析は、ここにある材料のなかでは沈黙させられているもの、あるいは欠落しているもの——参与者たちの志向や日常的な意味構成の部分としては聞かれないような論談的な糸——をも探求するものとなるだろう。(Wetherell 1998: 404)

(2) ビリクの批判

シェグロフとウェザレルのやりとりは、シェグロフとマイケル・ビリクの論争へと発展する。ビリクの議論(Billig 1999a, 1999b)は、ウェザレルの反論よりもはるかに過激であり、その意味で、外在的ではあるものの根本的であり、そこからいくつもの重要な論点を抜き出すことが可能である。

ビリクが問題視する論点は、基本的にウェザレルと同様に、シェグロフの最も基本的な主張に向けられている。すなわち、相互行為内トークは、「内的に基礎付けられたリアリティ」をもっており、したがって参与者たちのトークを「それ自身の見地から」検討しなければならない、というシェグロフの主張であり、いいかえれば、とくに批判的言説分析は、分析者の関心やカテゴリーを、研究対象に押し付けているという、シェグロフの批判である。

10) シェグロフの応答(Schegloff 1998)は、いたって簡潔なものだ。かれは、ウェザレルのいう「なぜこの発言がここにあるのか」という問いが、会話分析にとって問題であったことはないといっている。それは、参与者たちの問題であって、分析者たる者の問題ではない——その意味では、それに答えられる必要はない——というわけである。

ビリクがまず注目するのは、ウェザレルも示唆していたように、会話分析は、参与者たちの見地から分析するといいたが、参与者たち自身のものではない「専門家のレトリック」を使っている、ということである。会話分析もまた、高度に専門的な語彙を使用することによって、分析者の見地を押し付けているのではないか。「隣接ペア」「選好構造」「受け手デザイン」「自己訂正」などのカテゴリーは、とりもなおさず、分析者が参与者たちに押し付けているカテゴリーではないのか。結局のところ、会話分析は、参与者たち自身の見地を観察するために、分析者の見地を使用するというパラドクスに見舞われているのではないか、というわけである。「ナイーブな方法論と認識論」が、会話分析者に、かれらは「カテゴリーを押し付けていない」と主張することを許容しているにすぎない、とされる。

さらにビリクによれば、会話分析では、分析者と参与者たちは、たんに使用する語彙が違っていただけではない。分析者は、参与者たちが注意を向けていないものごとに注意を向けており、逆にいえば、参与者たちが注意を向けているものごとに注意を向けていない。端的に言えば、参与者たちが会話のなかで語る主題（トピック）そのものは、会話分析を行う分析者にとって、特別な関心事とはならないからである。

会話分析は、会話組織の一般的諸特性やパターンを、事例のなかから引き出そうとするのであって、そのようなパターンや一般的諸特性は、参与者たちが議論している特定の主題とはまったく関連していない。会話の一般的諸特性やパターンを明らかにするという分析の目的を達成するために、シェグロフは、参与者たち自身がそれについて話しているとみなしている特定の主題やかれらの主要な関心から、注意をそらしてしまう、というわけである。

ビリクによれば、ここには、二つの問題がある。第一は、「参与者たち自身の見地から」という会話研究の原則が、秩序の一般的構造を発見しようとするプログラムによって、じつは破られてしまっているのではないか、ということ。分析者は、参与者たちが自らの主要な関心とみなすものから、注意をそらしているのだから、ここではま

さに、分析者が、会話の記述に際して、分析者自身の見地を押し付けているのではないか、ということになる。

第二に、もしシェグロフの勧めにしたがうなら、分析者は、参与者たちが使用しない術語（会話分析の専門用語）を使用することによって、参与者たちが語らないものについて、語るようになってしまう、ということ。もしもそれに反して、参与者たちが語っているものを語ろうとすれば、分析者が、自らのカテゴリーを参与者たちに押し付けていると非難されるというのは、なんとも皮肉な話ではないか、というわけである。

以上の議論は、本稿にとってたいへん興味深いものである——もっともそれは、この議論がシェグロフの主張の問題点をうまくついているというよりも、むしろ逆に、(批判的)言説分析の前提と問題点が浮き彫りになっているからなのである。とくにビリクが、参与者たちが「語ること」、あるいはその内容や主題をことさらに重視しようとするのと、逆にウェザレルが、会話や相互行為において「語られないこと」にこそ注意を向けなければならないと主張していることは、それらが正反対で矛盾しているというよりも、むしろそこにみられる「語られること／語られないこと」という強力な磁場に、かれらが支配されていることを示すものとして、注目に値するといわなければならない。

よく考えてみれば、エスノメソドロジー・会話分析が、語られるにせよ語られないにせよ、何が語られるのか、あるいは何が語られないのか、ではなく、その仕方や方法に注目してきたということ、シェグロフのいいかたにしたがえば、会話分析が「形式」分析であるということの意味が、理解されなければならない。

しかも語ることの仕方や方法という場合、けっしてそれは、語ることをより上位の論理水準から支配している規則のことを指しているのではないし、語ることを再帰的に語ること、語ることがある種の観察・記述であるとするれば、観察・記述を再び観察・記述することでは、けっしてない。もし語ることの仕方や方法が、たんにそのような意味であるとするなら、仕方や方法への注目は、ただたんに、観察・記述の二重化を意味するものに

なってしまう。たしかに、社会学的観察や記述が、科学主義的に考えられた客観的な現実の観察・記述であるとする素朴な考え方に対しては、このような二重化を強調することも、意味があるかもしれない。だがしかし、やはりそれは、厳密には間違っているといわなければならない。仕方や方法というものの真の意味を理解するには、やはり、すべてを観察や記述として考える、あるいは語ること／語られないことという区別のもとで考える表象主義（認知主義）からの離脱が、必要なのだ。

エスノメソドロジー・会話分析のいう仕方や方法とは、語られることを指すのではないし、だからといって語られていないという意味で、「そこにはないもの（潜在しているもの）」を指しているのでもない。語りの仕方や方法は、じつは、語りとともに、まさに「そこにある」のであって、われわれの術語を使えば、まさにそこに「示されている」のである。語られる内容だけが「そこにある」わけではない¹¹⁾。

ところでビリクは、さらに会話分析の「土台となる（foundational）レトリック」を検討し、「会話分析のイデオロギー」を暴露しようとする。詳しくは、第3章で扱うが、会話分析では、日常会話と制度的相互行為を区別しており、しかもその場合、日常会話では、参与者たちが発話する平等の権利をもつものに対して、制度的相互行為では、そのような平等の権利に一定の制限が加わっている、というようないいかたがよくされることは事実である（Drew 1991: 21-22）。たとえば、教室や、法廷や、ニュースインタビューでは、だれが、いつ、どんな発言をすることができるかが、あらかじめ制限されている。

ビリクによれば、そこには、日常的相互行為における権利の平等ということが、とくに証明されることなく、前提とされてしまっているばかりでなく、さらに、そのような日常的相互行為に対して、方法論的・理論的な優位が与えられている。というのも、制度的相互行為は、いわば逸脱ケー

スとして、制限によって印づけられているのに対して、日常会話は、いわば原点とみなされているからである。

ここからビリクは、もし批判的言説分析が、社会的に批判的な概念を分析に持ち込んでいるというなら、会話分析は、いわば非批判的な概念を持ち込んでいるのであり、イデオロギー的に中立であるということではない、と主張する¹²⁾。

3. 日常会話と制度的相互行為

(1) 発話交換システムの変異

これまでは、（シェグロフのいう）当事者たちの「志向」あるいは「レリバンス」というものについて、はたしてそれがどのような事態を指しているのかということ、とくに議論してこなかった。そうはいつても、すでにこれまでの議論のなかで、少なくともそれがどのようなものではないか、ということについては、いくつかのヒントが提起されている。

まず、たしかにこうした表現は、いっけん当事者たちの意識あるいは主観性に関係しているのかのようにみえるかもしれない。ある制度的文脈やカテゴリーに、当事者たちが「志向」しているかどうか、かれらにとってそれが「レリバント」であるかどうかは、たしかに、個々人の意識や主観性の問題であるのかのようにみえるかもしれない。しかし「当事者たちの志向やレリバンス」という表現からも明らかなように、それは個人的なものではなく、複数の個人を含んだ、協同的な志向やレリバンスである。だからといって、もちろん個人を越えた集合的実体を想定しているわけではない。それは、当事者たちが相互に「示しあう」何ものかであって、あくまでそのような「示しあい」のなかでしか存在しない。さらにいえば、そのような志向やレリバンスは、相互行為のなかで（明示的に主題として）「語られる」何ものかではないということも重要だ。というのも、志向やレリバンスは、あくまで実践の一部なのであって、

11) このような点については、田中（2002）を参照。

12) これに対するシェグロフの応答（1999a）は、イデオロギー批判の部分に反応しているので、ある種の水掛け論になっているが、日常会話が必ずしも「平等性」と結びついているわけではないという主張は、興味深い。この点については、Atkinson（1982）も参照。

語られる対象ではないからである。それらが対象として語られたとたんに、今度は、その語られたという実践の一部として、何らかの志向やレリバンスが「示されて」しまうことになるからである。では、「示される」とは、いったいどのような事態を指しているのだろうか。

そこで、一般に「制度的場面 (institutional settings) の会話分析」と呼ばれている研究に注目してみたい。それは、会話的相互行為の外側であって、それを取り巻き、それに何らかの影響を与えているとされる、社会制度や社会構造の問題にかかわっている。しかしながら会話分析は、この問題に対して、シュグロフが主張しているように、参与者たちの志向やレリバンスの問題を、分析の原理として採用している。したがって、「制度的場面の会話分析」の諸研究を検討することによって、制度的文脈や制度的場面が、参与者たちにとって「レリバント」であるということ、参与者たちがそれに「志向」しているということ、そしてそれが相互行為において「示される」ということがどういうことであるのかが、理解できるはずだ。

ところで、「制度的場面の会話分析」といういかたは、じつはあまり望ましい表現ではない。というのも、すでに前章でもふれたように、「会話」という表現自体が、制度的ではない場面、つまり日常的 (ordinary) な場面と結び付いており、いわば制度的な制約が課されていない相互行為という意味合いをもっているからであって、定義上、会話は制度的ではないはずだからである。シュグロフは、会話が、社会的に組織された相互行為の一部であるという意味で、「相互行為内トーク (talk-in-interaction)」という表現を使っている (Schegloff 1987: 207=1998: 141)。もちろん、そのようにいったからといって、(日常) 会話を軽視しているということではないし、考えてみれば、会話分析そのものが、その当初から、ある意味で「制度的場面」を取り扱っていたのも事実である¹³⁾。では、日常会話と制度的相互行為との関係をどのように考えたらよいのだろうか。

この点については、すでにハーベイ・サックス

たちが、有名な「会話の順番取りシステム」についての論文¹⁴⁾のなかで、以下のように述べていることに注目しなければならない。

話し手の交代を繰り返しながら、一度に一人の当事者が話すようにするために順番取りシステムを使用するのは、けっして会話に限られるわけではない。順番取りシステムは、セレモニー、ディベート、会議、記者会見、セミナー、セラピー、インタビュー、法廷などにおいても、強力にはたらいっている。これらはみな、……会話とは違っているし、相互にも違っている。……一般的に、会話のための配分技術は、一度に一つの順番を配分する、というのは正しそうである。そのような作動様式の他の選択肢は、簡単に見つかる。たとえばディベートの場合には、あらゆる順番の秩序化は、「賛成」か「反対」かによって、事前に割り当てられている。ディベートとも会話とも違って、議長のいる会議では、部分的に、順番を事前配分している。

以上のことは、つぎのような構造的可能性を示唆するに足るものであろう。つまり、順番取りシステムは、……順番の配分に関して、線形に配置されているということだ。一方の極のタイプ (会話を例とするようなタイプ) は、「一度に一つの順番を配分」していく、つまり局域的に配分を決めていく。他方の極のタイプ (ディベートを例とするようなタイプ) は、「すべての順番の事前配分」を含んでいる。中間的タイプ (会議を例とするようなタイプ) は、事前配分的方法と局域的な配分方法とのいろいろな混合を含んでいる。(Sacks, Schegloff and Jefferson 1978: 45-46)

さらに、サックスたちは、その後で、以下のようにも述べている。

われわれは、直線的に並んだ二つの極を考え、会話が「一つの極」であり、「セレモ

13) この点については、Drew and Heritage (1992: 4) を参照。

14) 「会話の順番取り」についての簡潔な説明は、山田 (1999) や西阪 (1995) を参照。

ニー」がありうる他の極であるといってきたが、それによって、会話とセレモニーが、極としての独立した、あるいは同等な地位をもっている、と提案しているわけではない。というのも、会話は、発話交換システムの基礎的な形式とみなされるべきであり、直線上に並んだ他のシステムは、他のタイプの順番取りを達成するために、会話の順番取りシステムをさまざまに変形したものであるとみなされるべきであるからだ。こうしてみれば、ディベートあるいはセレモニーは、独立した極ではなく、むしろ会話の最も極端な変形であるということになるだろう。最も極端だというのは、会話が変化を許容する、最も重要でほとんどすべてのパラメーターを完全に固定するという意味においてである。(Sacks, Schegloff and Jefferson 1978: 47)

このような指摘は、その後の制度的相互行為の諸研究¹⁵⁾を主導することになるのだが、それらの諸研究の特徴は、ごくおおまかに、以下のようにまとめられるだろう。

まず第一に、日常会話の順番取りシステムが、発話交換システムの「基礎的」で、デフォルトな形式であり、「優先的」¹⁶⁾なものであるということ。いいかえれば、日常会話の順番取りシステムは、「可能化する制度 (enabling institution)」(Schegloff 1987: 208=1998: 142)であり、「他の制度化された形式の人格間の関係に対して、『基盤 (bedrock)』の地位をもち、……社会的に組織されたコミュニケーション的实践と手続きの完全な母体」(Heritage and Atkinson 1984: 12-13)であるということ。つまりそれは、あらゆる他の相互行為の形式が、そこからつくられ、そこから派生する「母型」であるということだ。

したがって第二に、制度的相互行為は、「基礎的」なものである日常会話の順番取りシステムに対して、何らかの制約・変形が加わったものとして、特徴づけることが可能であるということ。たとえば、教室、法廷、ニュースインタビューなど

は、日常会話のように、その都度、順番の組織を管理していくのではなく、何らかの形で、事前に順番の配分を管理している。たとえば、それらの場面では、つぎの発話者を選択するのは、教師であり、裁判官であり、インタビュアーであり、生徒、被告や原告、インタビューの受け手ではない。だれが、いつ、何を語ることができるか、についての一定の手続きが、そこにはある。

さらにいえば、これらの制度的場面は、とりわけ質問-回答という隣接ペアにかかわるシーケンシャルな組織の、日常会話とは異なるパターンによって秩序づけられている。たとえば、教室では、教師が質問し (Initiation)、生徒が答え (Reply)、さらに教師がこの答えを評価する (Evaluation) という特徴的なやりとり (日常会話では、そのような評価は避けられる) によって、それが教育的な場面であることが示されていることについては、長い研究の歴史がある。また逆に、法廷やニュースインタビューでは、日常会話で使用される「おー」というような「状態変化のトークン」は、それが新しい情報であり、またその情報の真実性と適切性を受け入れることを示してしまうので、避けられることも知られている (Heritage 1985: 96-101)。

第三に、日常会話においては、参与者たちが「対称的 (シンメトリカル)」な関係にあるのに対して、制度的場面では、参与者たちが、何らかのかたちで「非対称な」関係にあるということが出来る。ポール・ドリューとジョン・ヘリテッジは、以下のように述べている。

制度的相互行為についての研究の中心的テーマは、日常会話では、話者間の関係が対称的であるのに対して、制度的相互行為は、非対称的であるという特徴をもっているということである。(Drew and Heritage 1992: 47)

(2) 「[相互行為] 手続きへの帰結」

すでに確認したように、制度的相互行為の特徴、つまり制度的相互行為の制度性の核心は、最

15) 代表的なものとして、Zimmerman and Boden (1991) や Drew and Heritage (1992) を参照。また山田 (1995) や好井 (1999) は、紹介を含めて、この問題について体系的に論じている。

16) この点については、Heritage (1984: 238-240) を参照。

も典型的には、日常会話における発話交換システム（発話の順番取りシステム）に対して、一定の制約や変形が加わっているということにあり（発話の順番やタイプの配分についての事前の決定）、さらにまた、シークエンシャルな組織が、日常会話とは異なるパターンをとることによっても特徴づけられるものであった。もちろんそれらは、たんなる分析の出发点であって、それ以外に、さまざまな特徴が指摘され、そして分析されている¹⁷⁾。しかしここで強調しておかなければならないのは、それらが観察者によって観察可能な事実的で客観的な規則性やパターンの問題ではないということである。

結論からいえば、それはむしろ、当事者たちが、相互行為の一定の制度性に志向しているということ、あるいはその制度性が当事者たちにとってレリバントであるということ、このことが、具体的に相互行為の経過のなかで「示される」、その示され方の問題であるということだ。つまり、日常会話における発話交換システムから、何らかの仕方で変異した特殊な発話交換システムが、当事者たちによって、協同して遂行されているということは、それぞれの当事者が、その場面をある制度的な場面として、取り扱っていることを「示して」おり、別の当事者もまた、そのことを理解しながら、同様にふるまっているということにほかならない。

シュグロフは、レリバンスや志向性の問題と、相互行為内トークの具体的詳細との間の関係を「[[相互行為] 手続きへの帰結 (procedural consequentiality)】」という概念で結合させようとしている。

会話の文脈や場面のある特徴づけ（「病院で」のような）が、参与者たちにとってレリバントであり、かれらがそのように特徴づけられた場面に志向していることが、相互行為の詳細の分析によって、たとえ示せたとしても、もう一つの問題、つまりいかにして文脈や場面（局域的な社会構造）のその側面が、

トークの手続きに対して結果をもたらすかを示すことが残っている。トークが何らかの場面（たとえば「病院」）で行われるという事実が、いかにして相互行為の形状、形式、軌道、内容、あるいは性格に対して帰結を生むのか。そしてそのように理解された文脈が、トークに対して、明確な帰結をもたらすメカニズムは、どのようなものであるのか。

これは、私には、真正な問題に思われる。というのも、そのような連結の特定がなければ、文脈あるいは場面の特徴づけは、いかに当事者たちにとってレリバントであることが示されたとしても、……分析や説明や理解には役に立たないからである。

……文脈と、トークのなかで実際に起こっていることとの間の、直接的で、手続き的な結びつき…… [を明らかにしなければならない]。(Schegloff 1992: 111-112)

また、シュグロフは、法廷の例をあげて、以下のように述べている。

順番取り組織にぴったり照準するなら、開廷している法廷の「法廷であること」を構成しているのは、物理的な意味でその場面にいる人々や人々のカテゴリーに、トークを配分する仕方を事実として組織しているようにみえるものにほかならない。……かれらがいつ、何を話すことができるか、などを決定している社会的に組織された手続きがある。その場合、つぎのように議論できるだろう。つまり、相互行為内トークのある場面を「開廷している法廷」でのものとして特徴づけるということは、「社会構造」への一般的な関心に結びつけられうるばかりでなく……、同様に手続き的な帰結をもつことが示されうるような、そのような文脈の定式化によって、特徴づけることなのである。……行動のまさに形式によって、かれらは、法的に定められた特定のアイデンティティに志向していること

17) ドリユーとヘリテッジは、制度的トークの研究の焦点として、①語彙の選択、②順番のデザイン、③シークエンシャルな組織、④全域的な (overall) 構造的組織、⑤社会的認識論と社会関係、をあげている (Drew and Heritage 1992: 28-29)。

を示し、また文脈としての「開廷している法廷」に志向していることを示しているのである。(Schegloff 1992: 112-113)

シェグロフの主張は、こうである。つまり、たんにある実際の制度的場面の存在や、それに対する漠然とした志向やレリバンスだけでは、それが現実の相互行為に影響を与えているとか、厳密な意味で、当事者たちがそれに対して志向しているとか、当事者たちにとってそれがレリバントである、ということとはできない。相互行為の具体的詳細を決定しているメカニズムが解明されなにかぎり、このような志向やレリバンスは、それ自身あいまいなままである、ということだ。この制度的文脈への志向やレリバンスというものと、具体的相互行為の詳細を連結するメカニズムとして、かれが考えているのが、発話交換システムなのである。いいかえれば、発話交換システムの変異によってはじめて、制度的文脈への志向やレリバンスが受肉するといってもよいだろう。要するに、レリバンスや志向性というものは、相互行為内トークの特定のあり方のなかにあらわれる、あるいははっきりいってしまえば、相互行為内トークの特定のあり方そのものであるといってもよい。あるいは、われわれの表現を使えば、レリバンスや志向性は、相互行為内トークのなかで、「示される」のである。

ただし、このようなシェグロフの議論には、別の含意があることにも注意しておかなければならない。それは、あいまいで漠然とした社会構造や制度的文脈という概念や、それらへの伝統的な関心にできるだけ引きずられず、できるだけそのような概念を使わずに済ませようというものである。あいまいな社会構造や制度的文脈ではなく、相互行為の組織・構造そのもの(=会話交換システム)を、文脈として考えるべきだということだ(Schegloff 1987: 220-221=1998: 161)。たとえばかれは、「実験室」という場面をとりあげて、そこには、まったく異なる発話交換システムがみら

れることを指摘している(Schegloff 1991: 54-56, 1992: 114-116)。かれは、社会構造への照準と、会話(相互行為)への照準とのバランスの問題に注意を促し、相互行為の詳細が、安易な社会構造への関心によって吸収されてしまうことに対して、強い警告を発している(Schegloff 1991: 57-65)。そういう意味では、会話分析のなかに、二つの立場があるということさえできることになる。ヘリテッジは、それについてつぎのように述べている。

したがって今日では、少なくとも二つの種類の会話分析的研究が行われている。それらは、さまざまな仕方でオーバーラップしてはいるが、分析の焦点が違っている。第一の種類の研究は、相互行為という制度を、それ自身の権利における実体として検討し、第二の種類の研究は、相互行為のなかで、社会的制度が管理されることを研究している。(Heritage 1997: 162)

さらにポール・テン=ハーベは、前者を「純粋会話分析」と呼び、後者を「応用会話分析」といういいかたで区別している(ten Have 2001: 5)¹⁸⁾。

4. 認知主義の陥穽

すでに、第2章の(2)で述べたように、言説分析の諸研究は、「語られる」内容や主題という強力な磁場にとらえられている。かれらによれば、外的世界のできごとや内的で心的な現象すべてが、言説のなかで「語られる」ことによって、いいかえれば言説のなかで記述されたり、定式化されたり、カテゴリー化されたりすることによって、「事実」として社会的に構築されるというのである(当然、できごとにしる、心的な現象にしる、それらが言説のなかで「語られる」ことから独立した事実としての地位をもつことは、否定ないし判断停止される)。もちろん、外的世界ので

18) しかしながら後者の立場も、「内在性」の原理を放棄しているわけではないから、そこに「内在性の呪縛」からの解放をみようとする考え(好井 1999)には疑問がある。この点については、田中(1999)も参照。「内在性」の原理を放棄することは、本稿で扱っている言説分析の決定的誤りをも抱え込むことになる、ということ指摘しておきたい。

きごとや内的で心的な現象には、さまざまな言説に応じて、さまざまなバージョンがありうることになり、したがって言説は、そのようなさまざまなバージョンが、その事実性を競い合う場、いわば事実性をめぐる闘争の場でもある。そのような場で、どのようなバージョンが、外的世界のできごととして、あるいは心的状態として、正当なものとして認められるかが決まってくる。したがってかれらの関心は、人々がいかにしてあるバージョンを説得的に提示するのかという方法の問題、すなわちレトリックの問題に収斂していくことになる。

さらにかれらは、たしかに行為や言説の「実践」としての性格をたいへん強調しているのだが、それは、あくまで事実の構築という媒介を通してであるということにも、注意を払わなければならない。

たとえばジョナサン・ポッターは、「記述は、われわれの生活に結びついており、どんな会話も、できごとや行為の報告を含んでいる」(Potter 1996: 1) と述べたうえで、かれの研究の目的として、つぎの二つをあげている。すなわち第一は、いかにして記述が産出され、事実として扱われるかであり、第二は、事実の記述と行為の関係、つまり記述を用いて、どんな種類の活動がなされているか、いかにすれば、いかにして特定の行為は、記述によって遂行されるのか、である。かれの研究が照準しているのは、「記述が事実となる仕方であり、記述が何に使用されるか」(Potter 1996: 7) にはかならない。

つまり、かれらはいっけん言説を実践としてとらえようとしているようにみえるのだが、それはあくまで記述や報告による事実性の確立を媒介にしているということである。しかし、もしこのような立場をとるなら、言説を実践として考えるといういいかたは、その内実を失ってしまう。というのも、言説が実践であるという場合、問題になっているのは、たんなる記述や報告でさえ、社会的に効力や帰結をもたらす実践であるということではあっても、逆にあらゆる実践が、何らかの記述や報告を前提としたり、伴ったりするということでは、まったくないからである。実践が記述や報告による事実の構築を媒介にするというのな

ら、結局のところ、あらゆる実践＝言説が、報告や記述に還元されてしまうのであって、それでは、そもそも「実践」などという概念を導入する意味はなくなってしまう。

ところで、かれらは一方で、社会的な行為としての記述や報告にもっぱら注目するのであるが、他方で、知覚を外的世界のできごとの内的・心的表象とみなしたり、思考をそのような心的表象の操作とみなしたりするような認知主義(cognitivism)に対しては、すくなくとも表面上は、批判的なスタンスを維持しようとしている。

たとえばポッターは、事実と記述を理解するために重要な含意をもつ三つのテーマの一つに、「反認知主義」をあげ、認知主義が拒否されなければならない理由として、以下の三点をあげている(Potter 1996: 103-104)。第一に、そもそも内的で心的な「実体」として表象を想定すること自体の問題。第二に、表象が、それを使用する実践から分離してしまい、表象や記述によって何がなされるかに注意が払われていないということ。つまり相互行為に組み込まれた記述や表象が問題なのであって、知覚や表象のような、頭のなかの実体が問題なのではないということ。第三に、認知は、むしろしばしば社会的な場面で行われる記述の主題であるということ。したがって認知は、内的で心的な現象であるというよりも、むしろ社会的で言説的な主題として、取り扱われるということ。

デレク・エドワーズとポッターも、かれらの研究の目的が、第一に、心理現象を言説に関連づける新しいモデルを描くこと、第二に、言説心理学を支える分析的仕事のタイプを描くこと、そして第三に、知覚的認知主義との批判的コントラストを展開することにあるとして、以下のように述べている。

われわれが関心をもっているのは、知識、認知、現実の性質である。つまり、いかにしてできごとが記述され、説明されるのか、いかにして事実の報告が構築され、いかにして認知的状態が帰属されるのかに、われわれは関心をもっている。それらは、言説の主題(トピック)として、つまり人々が主題化し

たり志向したり含意したりするものとして、言説のなかで定義される。そのような言説的な構築物を、発話者の認知的状態の表現としてみるのではなく、むしろそれらは、……状況づけられた構築物として……検討されるのである。(Edward and Potter 1992: 2)

すなわちかれらは、一方でいわば社会的な記述をことのほか重視するのに対して、他方で心的な認知を拒否しようとしているのである。このことは、かれらが目指しているものがいったい何なのかを明らかにしてくれる。かれらが目指しているのは、とりもなおさず心的な認知を社会的な記述によって置き換えようということなのである。

たしかに、かれらのいう「記述」は、それに先立って独立に存在するものとしての客観的事実を想定してはいないから、それを「記述主義」と呼ぶのは、適切ではないといわれるかもしれない。だがしかし、行為や言説を、それらが何ものかを「記述」するものとしてしか考えない(記述される対象が記述そのものから独立しているかどうかにはかかわりなく)という意味では、かれらは間違いなく「記述主義¹⁹⁾」者である。そして何よりも、もし、記述の前提として、記述から独立した客観的事実を想定することだけが問題なのだとすれば、認知にしても、認知に先立つ客観的事実の想定だけが問題なのであって、認知によって事実が心理的に構築されるといえば、それだけで済むはずである。心的な認知そのものを批判する根拠は、そこから出てこない。つまり、「事実」がそれを記述するという営みから独立しておらず、社会的な構築物であるというなら、心的表象もまた、外的世界を正しく表象しているかどうかとはかかわりなく、心的な過程によって構築される心的な構築物である、といえは済むのであって、それでもなお、心的な過程そのものを否定する根拠はまったくない。だからこそ、このような理論構成では、心的現象が、言説のなかで社会的に構築されること自体は受け入れられたとしても、それ

でもしかし、それとは別個に何らかの心的過程や心的な構築物があるはずだという反論に対しては、それ以上の答えを返すことがけっしてできないのである。

なぜ認知過程を想定することが問題なのかといえば、それが社会的な記述を考慮に入れていないからではない。心的表象を媒介として、表象のルールにしたがった何らかの心的操作によって、意味や理解が生じているという見方そのものが問題なのである。だとすれば、社会的記述を媒介として、記述のルールにしたがった何らかの社会的操作によって、意味や理解、あるいは実践の効果が生じているという見方も、まったく同様に、問題にシなくてはならない。

大事なことは、認知や記述の対象が、そうした営みから独立しているかどうかではないし、心的認知を社会的記述に置き換えることでもない。認知や記述によってのみ、何ものかが何ものかとして構成されるとか、そうして構成された事実を媒介にしてのみ、実践が成り立つと考えること自体が批判にさらされなければならないのである。ジェフ・クルターも指摘しているように、かれらは、認知主義批判の射程の広さをまったく理解していない(Coulter 1999: 165=2000: 126)。

われわれがここで問題にしているのは、何ものかを表象したり記述したりすることだけが、何ものかを何ものかとして構成するという考え方なのである。われわれが現実の相互行為に目を向ければ、けっしてそんなことはないはずだ。むしろ何ものかを明示的に主題として記述したり報告したりする相互行為の方こそ、特殊なものなのであって、そうでなければ事実が構築されないなどということは、およそ現実離れしている。通常われわれは、そんなことはしていないはずなのである。われわれは、インクのシミをまず表象して、それを意味あることばに変換しているわけではないし、発言をまず記述として扱い、しかるのちに、その記述がどのような実践の含意をもつかを推論しているわけでもない。われわれは、けっしてそ

19) ここでいう「記述主義」とは、エスノメソドロジー・会話分析が「理論化」や「説明」と対立させて使用する場合の「記述」を指すのではなく、ジョン・L・オースティンが、言語のはたらきを記述に限定し、示し(indication)のはたらきを見過ごす傾向を「記述的誤謬」と呼ぶ(Austin 1976: 3=1978: 7)ような場合の「記述」を指している。

のような二段階の手続きを踏んではいないのである。その意味で、心的表象も社会的記述も、いわば同罪なのだ。心的な表象や認知を社会的な記述に置き換えただけでは、認知主義・記述主義・表象主義のもつ問題点そのものを乗り越えることはけっしてできない。

ところで、このような記述主義は、会話分析が主張する「内在性」の原理とは鋭く対立する。というのも言語のはたらきを記述に限定するなら、「示し」の領域は排除され、もっとも大事な実践的要素は——それは「示される」ものであって、「語られる」＝「記述される」ものではないから、見過ごされてしまう。そして「示される」ものとしての実践的要素こそ、相互行為の「文脈」を形成するものであるはずだから、それが見過ごされれば、その「文脈」は、分析者がいわば勝手に外部から付与せざるをえなくなってしまうのである。つまり「示し」の原理を見落とすことは、「内在性」の原理を見失うことであり、残されるのは、「語り＝記述」の原理であり、「外在性」の原理だということになる。

この考え方にたてば、相互行為を内在的に理解するなどということとは、できない相談なのだ。というのもかれらにとって、記述の正当性は、最終的には、もっぱらその記述が含まれる言説のなかで決定されるのであって、したがって記述は、はじめから記述の対象に対して外在的なものでしかありえないからである。ピリクはまさにこのような前提にたつて、シェグロフに批判を投げかけていたはずだ。会話分析が主張する「内在性」と「示し」の原理は、明らかにこのようなものとは異なる可能性に向けられている。ヘリテッジの以下のような指摘が、導きの糸となるであろう。

会話的相互行為は、順番ごとに行われる行為の組織によって、構造化されている。この組織によって、公的に示され、絶え間なく更新される相互主観的理解という文脈が、体系的に維持されている。参与者たちが、「トークの状態」を、互いにどのように理解しているかを示すのは、トークのこの「順番ごと (turn-by-turn)」という性質を通してなのである。こうして示された理解は、参与者たちの

シークエンシャルに組織された活動の、ある種の副産物あるいは間接的な結果として生じるので、「理解」それ自身の問題は、会話的「表面」では、ほとんど主題化されることはない、ということに注意を払うことが重要である。……このようにして相互的理解は、会話的相互行為のシークエンシャルに組織された詳細のなかに、ガーフィンケルの用語を使えば、「受肉するようにして」示されるのである。さらに、こうした理解は、公的に産出されるので、社会科学的分析の資源として、それらを利用することができるのだ。(Heritage1984: 259)

それでもしかし、「示し」について何かを「語ら」ざるをえない以上、やはりそれは、「語る」ことに回収されてしまうのではないかという疑問は、きわどい問題として、たしかに残る。しかしそれは、会話分析の使う意味での「記述」の問題、つまり「理論」や「分析」と対立する意味での「記述」の問題として、あらためて考えるべき問題であろう。

[文献]

- Atkinson, J. Maxwell, 1982, "Understanding Formality: Note on the Categorisation and Production of 'Formal' Interaction", *British Journal of Sociology*, 33: 86-117.
- Austin, John L., [1962]1976, *How to Do with Words*, Oxford: Oxford University Press. (=1978, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店.)
- Billig, Michael, 1999 a, "Whose Terms? Whose Ordinarity? Rhetoric and Ideology in Conversation Analysis", *Discourse and Society*, 10 (4): 543-582.
- , 1999 b, "Conversation Analysis and the Claims of Naivety", *Discourse and Society*, 10(4): 572-576.
- Boden, Deirdre and Zimmerman, Don H. eds., 1991, *Talk and Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*, Cambridge: Polity Press.
- Burr, Vivien, 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge. (=1997, 田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店.)
- Coulter, Jeff, 1999, "Discourse and Mind", *Human Studies*, 22: 163-181. (=2000, 藤守義光訳「談話と

- 心』『文化と社会』2: 124-148.)
- Drew, Paul, 1991, "Asymmetries of Knowledge in Conversational Interaction", Markova, I and Foppa, K. eds., *Asymmetries in Dialogue*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.
- Drew, Paul and Heritage, John eds., 1992 a, *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge: Cambridge University Press
- , 1992 b, "Analyzing Talk at Work", Drew, Paul and Heritage, John eds., 1992 a, 3-65.
- Edwards, Derek, 1997, *Discourse and Cognition*, London: Sage Publications.
- Edwards, Derek and Potter, Jonathan, 1992, *Discursive Psychology*, London: Sage Publications.
- , 2001, "Discursive Psychology", McHoul, Alec and Rapley, Mark eds., 12-24.
- Foucault, Michel, 1972, *The Archaeology of Knowledge*, New York: Pantheon Books. (=1981, 中村雄二郎訳『知の考古学』河出書房新社)
- Harré, Rom and Gillett, Grant, 1994, *The Discursive Mind*, Thousand Oaks: Sage Publications.
- Heritage, John, 1984, *Garfinkel and Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.
- , 1985, "Analysing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an 'Overhearing' Audience", van Dijk, T. ed., *Handbook of Discourse Analysis, Vol. III: Discourse and Dialogue*, London: Academic Press, 95-119.
- , 1997, "Conversation Analysis and Institutional Talk: Analysing Data", Silverman, D., *Qualitative Research: Theory, Method and Practice*, London: Sage Publications, 161-182.
- Heritage, John and Atkinson, J. Maxwell, 1984, "Introduction," Atkinson, J. Maxwell and Heritage, John eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 1-15.
- McHoul, Alec and Rapley, Mark eds., 2001, *How to Analyse Talk in Institutional Settings: A Casebook of Methods*, London: Continuum.
- 西阪仰, 1995, 「順番取りシステム再訪」『言語』24(7): 100-105.
- Parker, Ian, 1992, *Discourse Dynamics*, London: Routledge.
- Potter, Jonathan, 1996, *Representing Reality: Discourse, Rhetoric and Social Construction*, London: Sage Publications.
- Sacks, Harvey, 1972, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", Sudnow, David ed., *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press, 31-74. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法」北澤・西阪訳『日常性の解剖学』マルジュ社, 93-173.)
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail, 1978, "A Simplest Systematics for the Organization of Turn Taking for Conversation", Schenkein, Jim N., ed., *Studies in the Organization of Conversation*, New York: Academic Press, 7-55.
- Schegloff, Emanuel A., 1987, "Between Micro and Macro: Contexts and Other Connections," Alexander, Jeffrey C., Giesen, Bernhard, Münch, Richard and Smelser, Niel J. eds., *The Micro-Macro Link*, California: University of California Press, 207-234. (=1998, 石井幸夫訳「ミクロとマクロの間」石井他訳『ミクローマクロ・リンクの社会理論』新泉社, 139-178.)
- , 1991, "Reflections on Talk and Social Structure", Boden, Deirdre and Zimmerman, Don H. eds., 44-70.
- , 1992, "On Talk and Its Institutional Occasions", Drew, Paul and Heritage, John eds., 1992 a, 101-134.
- , 1997, "Whose Text? Whose Context?", *Discourse and Society*, 8 (2): 165-187.
- , 1998, "Reply to Wetherell", *Discourse and Society*, 9 (3): 413-416.
- , 1999 a, "Schegloff's Texts' as 'Billig's Data': A Critical Reply", *Discourse and Society*, 10 (4): 558-572.
- , 1999 b, "Naivete vs Sophistication or Discipline vs Self-indulgence: A Rejoinder to Billig", *Discourse and Society*, 10 (4): 577-582
- Schutz, Alfred, 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, New Haven: Yale University Press. (=1996, 那須・浜・今井・入江訳『生活世界の構成——レリヴァンスの現象学』マルジュ社.)
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre, 1986, *Relevance: Communication and Cognition*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (=1993, 内田・中達・宋・田中訳『関連性理論』研究社出版)
- 田中耕一, 1999, 「〈書評〉好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』」『社会学評論』50(2): 272-274.
- , 2002, 「規範と心——実践的行為の構造」『関西学院大学社会学部紀要』91: 71-85.
- , 2003, 「再帰性の神話——社会的構築主義の可能性と不可能性」『関西学院大学社会学部紀要』93: 93-107.
- ten Have, Paul, 2001, "Applied Conversation Analysis",

- McHoul, Alec and Rapley, Mark eds., 3-11.
- Wetherell, Margaret, 1998, "Positioning and Interpretative Repertoires: Conversation Analysis and Post-structuralism in Dialogue", *Discourse and Society*, 9 (3): 387-412.
- 山田富秋, 1995, 「会話分析の方法」井上俊他編『岩波講座 現代社会学 3 他者・関係・コミュニケーション』岩波書店, 121-136.
- , 1999, 「会話分析を始めよう」好井・山田・西阪編, 1-35.
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編, 1999, 『会話分析への招待』世界思想社.
- 好井裕明, 1999, 「制度的状況の会話分析」好井・山田・西阪編, 36-70.
- Zimmerman, Don and West, Candace, 1975, "Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation", Thorne, Barrie and Henley, Nancy eds., *Language and Sex: Difference and Dominance*, Rowley: Newbury House, 105-129.
- Zimmerman, Don H. and Boden, Deirdre, 1991, "Structure-in-Action: An Introduction", Boden, Deirdre and Zimmerman, Don H. eds., 3-21.

The Pitfall of Cognitivism: Conversation analysis and discourse analysis

ABSTRACT

As has been argued before, social constructionistic studies are based on the erroneous assumption of representationalism (cognitivism). In this paper, I am concerned with the difference between conversation analysis (CA) and discourse analysis (DA). DA is closely related to social constructionism. I shall show the pitfall of cognitivism into which DA studies fall in spite of their efforts to keep away from it.

In the first chapter, I shall examine the controversy between CA (E. Schegloff) and DA (M. Wetherell and M. Billig). Schegloff insists that conversation (“talk-in-interaction”) should be endogenously analyzed “in terms of the relevance and the orientation” which the participants display in their interactional details.

In chapter two, I shall show how Wetherell and Billig deny the possibility of Schegloff’s analysis. They emphasize the importance of the elements which are neither oriented to by the participants nor relevant to them. They maintain that the elements which are not endogenous in their interaction ought to play a greater role in the analysis.

In chapter three, in order to make clear what is meant by “in terms of the relevance and the orientation of the participants”, we need attend to the studies of interaction in institutional settings: “conversation analysis in institutional settings”. These studies show that the institutional contexts of interaction are not described and formulated as a topic of that interaction, but displayed in the forms of the speech-exchange system and other sequential organization; these forms are variously transformed from those of ordinary conversation.

In the final chapter, I shall note that DA studies reject the existence of psychological cognition as an inner process, whereas they assume that every fact is socially constructed through the descriptions in discourse. They seem to try to substitute the social and discursive description for the psychological cognition. However, since both discursive description and psychological cognition assume only a representative (=cognitive) mode of human relation to the world of external and internal objects, the main issue then is not whether it is *social* description or *psychological* cognition, but whether it is *cognition and description* or *display*. Therefore, on the erroneous assumption of cognitivism, DA studies are forced to lose sight of the possibility of the analysis of contexts displaying and of the endogenous analysis of interaction and discourse.

Key Words: cognitivism, conversation analysis, discourse analysis, institutional interaction.